

令和5年度教育委員との意見交換会（意見概要）

1 目的

教育委員会（教育長、教育委員）が、教育に関するテーマに沿った参加者と意見交換することにより教育的ニーズを聴取する機会とし、教育行政の進展を図る。

2 日時・場所

令和5年12月20日（水）15：50～16：40

市役所本庁舎10階 教育委員会室

3 参加者

- ・若手教員 6人（小学校3人、中学校3人）
- ・教育長・教育委員 6人

4 意見交換テーマ

教職の魅力向上について

- （1）先輩や子どもたちから得た学び
- （2）採用前後で感じたギャップ

5 意見概要

若手教員が「これまでの教員生活で先輩や子どもたちから得た学びの経験を基に、今後の教員志願者等に向けて発信できる教職の魅力」や、「自身が採用前に思い描いていた教員生活と現在の教員生活を比較して、ギャップと感じていること」について考えを述べた後、教育長・教育委員を交え自由な意見交換を行った。

■「先輩や子どもたちから得た学び」について

- ・この5年間で出会った先生方から、子どもたちの心に寄り添う指導や授業について多くのことを学んだ。
- ・常に子どもたちに一生懸命に関わっている先生が、自分の憧れの先生である。
- ・教員の魅力としては、子どもたちの成長に深く関わることができることだと思う。
- ・教材研究では、子どもたちがどう考えるか、どこにつまずくか、子どもたちにはどんな手立てが必要だろうかと考えて授業を組み立てることが楽しい。
- ・苦手だった子どもが一生懸命努力し、できるようになったときの笑顔を見たときはとても感動的で心が動かされる。
- ・子どもたちの成長に関わりながら、自分自身も成長でき、とても魅力ある職業だと思う。

- ・子どもたちの新しい発見や成長を、子どもたちと共に感じられることが教職の魅力だと思う。
- ・子どもたちの口から「できた!」「わかった!」が出たときに、教員になることができよかったですと感じる。
- ・子どもたちは、できないことがあったり、思うようにいかなかったときに、教員に助けを求めてヒントを欲しが。その際、教員が考えた手立てによって、子どもたちのその考えが変わったり、できるようになったりしたときに私自身も嬉しく感じる。このような瞬間を1つでも増やすために、毎日の教材研究や準備に時間をかけ、「子どもたちのために」と力を注いでいる。
- ・先輩から見て学ぶことができたり、教えてもらったアイデアをすぐに実践したりできる環境にいると感じている。
- ・自分自身の成長を感じられる場面がとても多い。

- ・子どもたちと過ごしている時間が長い分、子どもたちの成長を一番近くで感じられることが教員にとって最高の魅力だと思う。
- ・例えば、運動会の表現の発表に向けて、子どもたちは振り付けや隊形移動をゼロから覚えていった。はじめは、振り付けも移動のタイミングもバラバラだったが、一緒に振り付けの練習をしたり、タイミングを合わせるコツを教えたりすることで、少しずつ揃うようになってきた。次第に、子どもたち自身がより良いものにしようと考えて練習するようになった。本番では、振り付けも隊形移動のタイミングも揃い、今までで一番良い発表になった。
- ・出来た瞬間だけではなく、そこに至るまでの指導や子どもたちの努力によって成長していく姿を目にすることができるところが教職の魅力だと思う。

- ・先輩の存在が身近で、毎日多くの学びや発見がある。学級では、すぐ隣に先輩がいるため、お手本となるような存在が常にある。学級で全体指導が上手くいかないときにすぐに相談でき、教室掲示、学級での話し方などにおいてすぐに学べる。
- ・子どもたちが変容していく姿が興味深い。子どもたちの成長は非常に早く、毎日様々なことを吸収し、成長していく姿も見られることが楽しい。教科指導で、毎日力を付けていく姿に喜びを感じる。問題を理解した時の子どもたちの顔は忘れられない。友達同士で接する中、人間としての成長が見られる部分もあり、大人になっていく姿が頼もしい。
- ・自分自身の人間性の成長にもつながっている。子どもたちや保護者は、予想以上に素直な意見を述べ、公正公平を重んじており、子どもたちから学ぶことも多い。様々な人の気持ちを考えるようになり、多面的・多角的に物事を考えるようになった。

- ・教職の魅力は「子どもたちの成長をそばで見守ることができること」と「自分を成長させることができること」だと考えている。
 - ・進路に対して何も意識していなかった子どもたちが、高校等の上級学校訪問を経て、「〇〇高校に行きたい」といった、自分の夢を生き生きと語る姿を間近で感じることで嬉しかった。
 - ・教科指導や部活動の支援も含めて子どもたちの頑張りを一番近くで見ることができるのが魅力であると思う。
 - ・今年度は、自然教室・生徒会・教育相談を担当している。管理職の先生方等の支援を受けながら取り組んだ。立場が人を育てるということを実感した。子どもたちにも色々な立場に立たせてあげて、成長を見守りたい。
-
- ・先輩教員から得た学びとして、「教育活動は、目標と準備がしっかりできれば素晴らしいものになる」ということがある。
 - ・教員が子どもたちに「何を学ばせたいのか」「何を達成させたいのか」「どういう人になってほしいのか」などの願いに近い目標の設定がすごく大事である。
 - ・教員が子どもたちの目標設定を明確にし、準備を行えば、子どもたちの成長のチャンスと感動の瞬間に立ち会えることができ、これが教職の魅力だと思う。
 - ・子どもたちから学んだことは「最初からうまくいかないことのほうが多い」ということである。
 - ・教員は、活動の結果を見がちだが、子どもたちにとっての活動のレベルやタイミング、教員の準備が適切だったかを見直し、その失敗を共有し、最後には子どもたちが輝けるような準備をしながら一緒に歩む必要がある。私自身、これらのことを意識して活動できた時は、子どもたちと成功の瞬間に立ち会えたことが多かったため、そこが教員の魅力であると思う。

■「採用前後で感じたギャップ」について

- ・ギャップと感じていることは、2点ある。
- ・プラス面では、勤務時間や保護者対応など、不安なことが多かったが、学年や管理職の先生方に支えられ、大きな負担を感じることなく楽しく仕事を行えている。初任で単学級を任されたときには孤独感があったが、今は大規模な学校であり、複数人で学年を組むのでありがたい。
- ・マイナス面は、教材研究や学級のこと以外の業務がたくさんあることである。採用前は見えなかった一部の校務分掌や会計など、実際に子どもたちとは繋がらないような業務に負担を感じている。初任で単学級の学校に勤務していたときは、たくさんの校務分掌を抱え、学年の仕事を一人で行うことで、子どもたちに直接還元できる業務は多くなかったように感じた。

- ・ギャップと感じていることは、2つある。
- ・1つ目は、教員同士の連携がとても強いことである。採用前に思っていた学校という職場は、学級担任をもつ教員が、任された学級だけを指導していき、困ったときにも自分の力で何とか解決していくものだと思っていた。実際の職場は真逆で、学年間、学校全体で助け合い、抱えきれない問題があったら全員で対応していく場所であり、実際に私も多くの方に何度も助けられた。発達障害があり、学習中に教室から飛び出してしまう子どもがいたときには、学校体制で対応したり、量が多い会議資料を綴じる作業でも何も言わずに協力してくれることが多々ある。学校は一つの組織として動いていて、チームワークが欠かせない職場だということを、採用後に強く感じている。
- ・2つ目は、思っていた以上に、子どもたちのために多くの時間と力を注いでいることである。時間外労働が多いことや、体力がいる職業であることは、採用前にも知っていたが、予想していた時間と体力を超え、大変な職業であることを身に染みて感じている。子どもたちの指導のために何ができるのかを考えると、現在の勤務時間では足りず、多くの時間を費やしているのが現状である。子どもたちのために妥協はしたくないという思いもあり、日々その気持ちと葛藤している。そのため、期日が早い職務から計画的に行ったり、学習の指導方法を同学年の教員と共有したりして、時間を有効的に使っている。

- ・ギャップと感じていることで、マイナス面としては、仕事の内容が多岐に渡ることである。教員として働くまでは、仕事の中心は学習指導と教材研究だと思っていた。実際には、会計や行事の準備、保護者対応などの生徒指導的な業務がとても多い。さらに、期限が決まっていることや相手の予定に合わせてたりすることがあるため、教材研究の優先順位が低くなり、後回しになってしまうことがある。そのため、遅い時間まで教材研究を行うこと、どうしても間に合わないときには直前に準備をして授業をすることもある。また、保護者対応では、こちらの指導が子どもの主観で伝わるため、指導の意図が保護者にうまく伝わらず、協力がなかなか得られないことが多くある。時には、長時間や長期間の対応が必要になったり、一方的に責められたりして、精神的に辛いこともある。放課後のことやSNSでのトラブルなど学校生活以外の時間に対しても対応を求められることもある。
- ・プラス面としては、周りの先生方の協力が手厚いことである。初任のときに、初めての学級懇談会で、学年主任の先生が「クラスは分かれているけれど、1年生の担任として2人で一緒に子どもたちを見ていきます。」と発言した。自分の学級をもつので、担任として自分でやらなければいけないと不安に思っていたが、一人で何でも抱え込む必要はないのだと気付かされた。1年間、どんな些細なことや大変なことでも一緒に考えてくれ、とても心強く、最後まで乗り切ることができた。これは、どの先生方も同じで、子どもたちや保護者の対応に困ったときには以前担任だった先生から助言を受け、学年主任や教務、管理職の先生が間に入って対応したりと、大変なことはみんなで乗り越えていこうという温かい雰囲気の仕事に取り組むことができている。

- ・ギャップと感じていることは、プラス面で2点、マイナス面で1点ある。
- ・教員は多忙で、周りに仕事についての相談をする時間もないかと思っていたが、実際は職員同士のコミュニケーションがとりやすい職場である。教科で悩んでいることや、子どもたちとの関わりについて相談したいことがあるとき、気軽に話ができる。
- ・初任校からの異動で、専門外の陸上部の顧問になった。最初はどのように指導していくべきか不安があった。現在は、個人競技であるものの、集団としてみんなで成長できる陸上の面白さがわかった。自分自身いろいろな分野に興味をもてるようになった
- ・大学をはじめとした様々な学びの場で獲得してきた知識を生かそうとしているが、現場で子どもたちを前に、十分に発揮できていないと思うことがある。教科指導や生徒指導で、思うように指導できないことが多い。

- ・教職に就いて、ギャップを感じたことは“見えない仕事”の多さである。

教科指導に関しては、日々の授業の教材研究のみならず、ノートやワークの点検、定期テストの作成や採点、学期末には成績処理まで行き、宿泊行事に関しては、教員が細案を作り、しっかり準備する。

私が中学生の頃の担任の先生は、絶対に忙しかったはずなのに、「いつでも相談しにおいで」と笑顔で話を聞いてくれた。

- ・教員になった今、今度は私自身が子どもたちに還元する番だと考えている。「忙しいから子どもたちと話す時間がない」ではなく、見通しを持って“見えない仕事”を行い、本質である「忙しいけど、子どもたちと向き合う時間もしっかりと確保する」「見えない仕事に誇りを持つ」そんな教師でありたいと思う。

- ・仕事内容については、採用前後でギャップは感じなかった。

- ・ギャップを感じた部分の1点目は、自身が中学生だったころと比べると、今の中学生は「できない、うまくいかないことに耐性が弱くなっている点」である。課題が期限内に出せない、〇〇からの視線が自分を嫌っている気がする、何かがうまくいかないときなど、気持ちが落ちてしまって学校を休んだり、ストレスの解消方法がなく、持ち物や自分自身を傷つけてしまったりする場面が今まであった。大人からすると「そんなことで」と思うことが、子どもたちにはとても大きな出来事になることがある。それを念頭において、一般的な常識とはずれていても「子どもたちの常識」を認識しながら、子どもたちと携わり、卒業するまでには自分の力で進んでいけるように中学校教員は育てていかなければいけないと感じている。

- ・2点目は「システムによる統一化がなされていない点」である。「子どもたちに直接携わるところ以外の事務的業務」や「ICT 機器の互換性」、「デジタル化によるペーパーレス」については、統一化を図り、わかりやすいシステムを学校全体、教育業界全体で構築していければ、教員が割くべきところに時間と労力をかけられ、教育活動の質や教員の負担の軽減にもつながると考える。ひいては教職の魅力向上になると思う。

■教育長・教育委員からの質問やメッセージ

・赴任2校目になってはじめて気が付いたことがあるか。

→子どもたち一人一人にあまり違いは無いが、集団となると、学校ごとの雰囲気の違いを感じる。

→初任は単学級の学校、今は大規模校である。教員が多い分、色々なスペシャリストがいることから、教えてもらえることも多くなった。

・小学校と中学校では、業務形態が異なると思う。

小学校の教員はオールラウンダーであることを求められ、負担ではないか。

超過勤務の要因で教材研究や授業準備があると聞いている。

→専科指導教員の配置により空き時間があることは助かっている。

例えば、理科と家庭科は事前準備を多く必要とする科目であり、非常にありがたい。

→スクールサポートスタッフの配置も非常にありがたい。

・中学校の教員は、部活動や進路指導の業務があるが負担感はどうか。

→部活動は地域移行の取り組みが始まっている。土日も部活指導を行うことは大変であることは事実であるが、子どもたちと一緒に活動することは楽しい。地域移行については、嬉しい反面、寂しい部分もある。

→専門外の部活動の顧問を担うことは負担が大きいと感じている。子どもたちのレベルを上げるため、より良い経験を積ませてあげるためには、専門的な指導を受けることができる地域移行の取り組みは必要であると思う。

→進路指導については、市全体でマニュアルを作成するなどして事務作業の統一化を図ることで、教員の負担を軽減できるのではないか。その結果、子どもたち一人ひとりの進路に向き合うことにより多くの時間を割くことができると思う。

・子どもたちに対しては、個の対応、チームとしての対応があるが、教員同士がしっかりとチームを組んでいくことを大事にしてほしい。

・本日は若手教員の皆さんから大変貴重な話を聞くことができた。皆さんの発言にあった、「子どもの成長を見るのが嬉しい」「子どもに寄り添うスタンス」「自分自身の成長にもつながる」ということが、本日の意見交換のキーワードであると感じている。